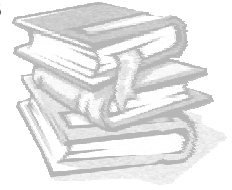




# イギリス科ニューズレター

No. 7 October 2003

東京大学教養学部地域文化研究科イギリス地域文化分科  
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 317)  
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)  
E-mail: [british@ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:british@ask.c.u-tokyo.ac.jp)  
Home page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp/>



いつのまにか季節が進み、街の樹々が赤や黄に美しく色づいてきました。駒場では10月の第2週より冬学期がはじまり、イギリス科の研究室は、授業の行き帰りに立ち寄ってくださる先生方、資料を求める学生、コピーを取る学生、親切な助手、それにコーヒーを飲みお菓子を食べに来る主任など、様々な人々が集まって、また本来の和気あいあいとした、暖かい部屋にもどりました。

9月早々リチャード・ピアードさんがご家族とともに来日され、10月1日をもって正式に前任者のフィッツサイモンズさんと交替、イギリス科の新たな外国人教師に就任されました。フィッツサイモンズ先生には今学期は引き続き4年生の卒論指導の授業をご担当いただきますが、3年半の間ありがとうございました。

ピアード先生はまだお若い方ですが、すでに何冊か小説を出版されたばりばりの作家です。とても面白いアイデアに満ちた授業を行なってくださっています。熱意ある学生にとって素晴らしい先生であることを疑いませんが、それと同時に日本での何年かの経験が、将来小説として実を結ばれることを念願します。

9月の末に地域学科への進学者が決まり、10月3日に行なわれたイギリス科のガイダンスには、5~6人の学生が集まりました。最終的に誰が来るかは分かりませんが、今年も例年と同じくらいの人数になるのではないかと皮算用しています。11月22日には第2回の卒論中間発表会が行なわれ、その後で進学者の歓迎会を予定しています。賑やかな会となることを期待したいと思います。

(イギリス分科主任・山本史郎)

## 新任のごあいさつ

アルヴィ宮本なほ子

四月からイギリス科に赴任したアルヴィ宮本なほ子です。どうぞよろしくお願い致します。専門はイギリス・ロマン派の詩です。本郷の文学部の英文科に行き、そのまま大学院へ進学しました。Percy Bysshe Shelleyの詩に関する文学的な修士論文を書いた後どうしようかと迷っていた時に、駒場から本郷に授業をしにいらしていた山内久明先生に相談ののっていただいてトロント大学に行くことにしました。英文からトロントというのは当時(も今も)ちょっと珍しかったのですが、大学に入って最初の英語の授業だった出淵博先生のテキストがNorthrop Fryeで、その時はNorthrop Frye Hallという建物がある大学へ行くことになるとは夢にも思っていませんでした。さらに、トロントへ行く飛行機のチケットを買った時点では、九十年代の大半を日本の外で過ごすことになるとは考えていませんでした。人生というのは予測不可能なものです。

英文学を研究対象にしてイギリス(あるいはアメリカ)へ行くという通常のルートを逸れた七年半は、予測不能な事態がいろいろと起こってその度に懐疑的になっていたのですが、道を外れた分と時間がかかった分思わぬ拾い物がたくさんあって、後から考えれば実に実りのある七年半でした。トロントの英文は、大学院を受け持つスタッフが六十名以上の世界最大規模の大学院で、私はAlan Bewell先生の下でShelleyとロマン主義の時代のジオポリティクス

についての博論を書き、論文のアドバイザーの一人がカナダ現代詩を代表する詩人の一人Jay Macpherson先生だったこともあり、カナダ文学やカナダの多文化主義の現状についても目を開かされることになりました。しかし、研究の方向に重要な影響を与えたのは、カナダ人や南半球から来ていた友人たちが見せるイギリスに対する複雑な態度でした。二十世紀も終わろうとしていた時にも「コロニー」という言葉はまだ生きて使われていて、「ポスト・コロニアル」の時代になったのかどうか分からないような出来事があちこちころがっていました。

一九九九年の春に日本に戻って、駒場の言語情報の助手になりました。すっかり浦島太郎状態になっていた私には四月はかなり残酷な月でしたが、助手の浜井祐三子さんのいるイギリス科のコモンルームにこっそり遊びに行ったりして、その後はそれなりに楽しく過ごし、一年半後に千葉大の文学部に行きました。私が所属した国際言語文化学科は、自由にいろいろなことをしてよかったので、イギリスのロマン派研究をメインとしながら、ロマン主義の時代に移民が始まり植民地化が進んだ地域をサブ・エリアとしようとして徐々に領域を広げて、現在は対蹠地(antipodes)から見たイギリス・ロマン主義という観点からオーストラリア、ニュージーランドも研究の対象にしようとしています。

イギリス科の学部の卒論のリストを見たら、最近ではイギリス以外の広域英語圏に関係するものも幾つかあるので、私の経験や研究領域が役立てばいいなと思っています。

## 草光教官の・・・ イギリス便り

留学の最大の特典は「緊張感に支えられた自由」と私に教えてくれたのは山内久明先生でしたが、青春時代の留学とは異なり、50代後半の海外研修も、やはり同じような緊張感とすべてに開かれた好奇心に満ちた貴重な時間を満喫する毎日です。

ケンブリッジのガートン・コレッジは19世紀末に出来た女子校でしたが、1970年代に共学となり、今ではケンブリッジで3番目に大きなコレッジです。町から若干離れていますが、大学図書館の近くにも学寮があり、恵まれたコレッジといえるでしょう。今日10月21日には、フェローと奨学生達の為のアドミッションの儀式がありました。私はヴィジティング・フェローですが、この儀式に招かれ他のフェローと一緒に一人ずつ次のような宣誓をしました。  
'I, Toshio Kusamitsu, hereby promise to observe the Statutes of the College and in all ways within my power to further its progress in learning and research.' そしてコレッジの冊子に自分の名前をサインしてから、ミストレス(コレッジの学寮長)が'I admit you as a visiting fellow in the confidence that you further the worthiest tradition of this College.'と入会を許すのですが、中世のフリーメイソンの儀式のようで緊張しました。



草光俊雄教官(ケンブリッジにて)

そのあとホールで食事をしましたが、ハイテーブルだけでは納まらず、下のテーブルもすべてこの日のために正式のディナーの支度がしてあり(そのため学部の学生は奨学生を除いて今日はホールでは食事が出来ませんでした)私はミストレスの近くのハイテーブルに席をあてがわれ、友人の歴史学のフェローの隣で割とリラックスして食事が出来ました。ハイテーブルには何度も行っていますが、今日は私にとっても特別なものでした。コレッジごとにいろいろ風習が異なり面白いです。先週はダウニング・コレッジに夫婦で招かれ、再来週はエマニュエル・コレッジに行きます。女房は英語が出来ないので憂鬱だといっていますが美味しい食事とワインを楽しんでいます。食後のポートやクラレットも上等なものが出てきて、飲んべえの私としてはうれしい限りです。

ケンブリッジだけでなく、先日はウィルトシャーまで出かけ(元駐日英国大使に招待されたのです)その途中でストーンヘンジを見たり、翌日はソールズベリの大聖堂を見に行ったりと、家族のための観光もきちんとしています。再来週はオックスフォードに招待されて出かけます。

イギリス科出身、あるいは院の指導学生達とも時々会っています。現在ケンブリッジには新君、伊東君、櫻井さん(ドイツ科)、後藤さん(本郷西洋史)がいます。ロンドンには堀越君、オックスフォードには永井君、レスターに伊藤君、とかなりの人数になります。草光ゼミがイギリスに引越してきたようです。

9月の末には塚本先生とお嬢さんのクレオパトラさん(ケンブリッジの学生だった)に会いました。塚本先生は日本に帰るのが辛そうでした。

先々週から大学が正式に始まり、セミナーもぼちぼち始まりました。すべてに出席するには体がいくつあっても足りません。しかし学生達にとっては素晴らしい刺激だと思います。是非日本でもこうした制度が定着して欲しいものだと思います。

## イギリス科ウェブサイト

<完成>

永らくお待ちいたしました。ついに、新しいイギリス科ホームページが完成しました。まだまだ基本的な項目のみのシンプルなサイトですが、今後は随時更新を重ね、みなさまにイギリス科の最新情報をお伝えしてまいります。

このサイトが、現イギリス科生のみなさんと、現在社会のさまざまな分野で活躍しておられるイギリス科卒業生のみなさんをつなぐ橋渡しとなることを、そして、イギリス研究に関心をお持ちのすべての方への情報提供の場となることをお祈りしております。

アクセスはこちらから

<http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp>

## イギリス科の授業科目

平成15年度冬学期開講の関係授業名は、以下の通りです。

イギリス歴史社会論 Ⅱ/イギリス言語変遷論/イギリス思想テキスト分析 Ⅱ/イギリス文学テキスト分析 Ⅱ/イギリス表象芸術論/特殊講義 Ⅲ(現代イギリスの文化)/特殊講義 Ⅳ/特殊研究演習 Ⅰ(現代イギリスの文化)/特殊研究演習 Ⅲ/イギリス政治文化論演習 Ⅰ/広域英語圏地域論特殊演習/論文指導 Ⅱ

## イギリス科運営委員

本年度のイギリス科運営委員は、山本史郎、草光俊雄(今学期在外研究中)、安西信一、エリス俊子、河合祥一郎、木畑洋一、小林宣子、斉藤兆史、田尻芳樹、丹治愛、中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子、Richard Beard、Paul Rosster、Brendan Wilson、渡辺愛子(助手)です。

## イギリス科からのおねがい

住所変更をされた方は、お手数ですがイギリス科までお知らせください。